

発行：株式会社リンク・インタラック
担当：事業統括ユニット プロダクト開発グループ
住所：東京都中央区銀座四丁目12番15号
TEL：03-6853-8265 FAX：03-6859-9070 E-mail：info@interac.co.jp



英語教育の発展を目指す「ALT基礎力テスト」の活用

新型コロナが収束に向かい、国境を超えた人の移動が再開しつつある今、児童生徒にはグローバルな環境の中での課題解決能力を育むことが求められています。ALTの資質・能力はその育成に大きな役割を果たします。このほどリンク・インタラックが開発した「ALT基礎力テスト」は、ALTに求められる姿勢や知識を測定する画期的なテストです。ALTの能力を可視化することで、日本人教員と一緒によりよい授業を作り、子どもたちの英語運用能力向上につなげるALTの育成が可能になるものです。テストの概要と共に、監修者の声、導入した教育委員会の声をお届けします。

ALTに求められる姿勢・知識を可視化

子どもたちや現場の先生、教育委員会が期待するALTの姿はどのようなものでしょうか。子どもが好きで笑顔を絶やさないALT、子どもの学習意欲を引き出せるALTなど、その「素質」や「指導技能」にあることは言うまでもありません。

しかし、真に優れたALTはそれらに加え、学習指導要領に基づく日本の英語教育について理解があり、学校という環境で円滑に業務遂行ができる「心構え・姿勢」を備えているものです。ただ、こうした力はこれまで可視化されてきませんでした。また、良いALTの「基準」を客観的に捉えるツールもなく、結果として配置されたALTがどのような能力を持っているかが分かりにくい、という課題がありました。配置されたALTに対して指導主事や現場の先生方が個別にフォローアップすることも少なくなかったはずでした。

現在、ALTに期待されている資質・能力は国際交流や異文化理解促進に加え、英語運用能力、コミュニケーション能力育成にまで拡大しています。また、客観的な根拠に基づいた学校教育の改善が叫ばれる中、ALTに求められることを整理し、客観的に捉えることができれば、よりよい授業につながるだけでなく、自治体におけるALT採用の効果も明らかにすることができます。

30年以上にわたりALT配置事業を手掛けてきた弊社は、こうした課題意識に基づき、ALTに求められる基礎力を測定する「ALT基礎力テスト」を開発しました。直近3年間の約3万件に及ぶ学校の先生方からのコメントをすべて分析し、ALTに求められる「姿勢」と「知識」を抽出。それらがALTに身に付いているかを判定するテストです。

オンライン学習は全8コース。学習内容は次の通りです。ま

ず「姿勢」のカテゴリーでは「役割理解」「規範遵守」「自己管理」「関係構築」の4つのテーマで学びます。ALTが日本の学校で期待されていることへの理解、とっていいでしょう。

例えば「役割理解」では、ALTと日本人教員それぞれの役割を理解すること、教員や学校がALTに期待することを十分理解することなどが含まれます。学習内容はALTと直接関わっている先生方の声を集めて作成されていますから、これを体現できるALTは学校で責任をもって業務にあたることができます。

「知識」のパートは「教育目標」「言語活動」「言語表現」「指導計画」に分けました。学習指導要領に基づく日本の外国語教育の方針や内容を理解するのが目的です。4技能5領域の目標やその達成のために必要な言語活動、言語表現、指導計画に関する前提知識を学びます。これらを身に付けることにより日本の学校教育で求められている外国語教育が展開でき、日本人教員や他の教科との一貫性、統一性も図れます。

「姿勢」と「知識」のオンライン学習後、80分80問のテストを受験し、判定を受けます。合格者には「合格証」が与えられ、日本の学校でALTとして業務にあたるべき基準をしっかりと満たしていることが証明されます。理解が十分でなく「不合格」となった場合はフォローアップの個別研修に参加し、再受験に備えます。

「ALT基礎力テスト」を受験することでALTは授業での指導力・授業力の向上が期待できます。これまでALTの研修に苦勞してきた教育委員会も、同テストを採用すれば負担の軽減につながります。配置するすべてのALTに対して受験を推奨することで、地域全体のALTのレベルの平準化にも役立てることができます。

特別インタビュー

敬愛大学英語教育開発センター長・
向後秀明先生に聞く

「これからのALTに求められる資質・能力」

今回の「ALT基礎力テスト」を開発するにあたり、弊社は敬愛大学の向後秀明教授に監修をお願いしました。ALTの配置が日本で始まり、期待される役割が時代と共に変化していく様子を、学校現場や行政の立場から見てこられた向後先生に、これからのALTに求められる資質・能力についてうかがいました。



向後秀明先生（敬愛大学英語教育開発センター長・国際学部国際学科教授）

ALTの知識不足が指導に影響

—— 教員免許を持たないALTについて、学校現場ではその能力についてこれまでどのような課題があったのでしょうか。

向後先生：日本の学校でALTになる方は、大学卒を基本として来日します。ですが、第二言語習得理論を学んできているケースは多くありません。また、日本では、人々が日常生活の中で英語に触れたり英語を実際に使ったりする機会が十分ではありません。そうした状況で英語教育を展開している日本において、どのような言語学習が行われるべきかということについては、必ずしもすべてのALTが知識を備えているわけではないことが課題となっています。自分はどのような環境下において、自分に求められていることは何かを十分理解できていない状況のまま、児童生徒の指導にあたらなくてはならないALTが多いという現状があります。

日本という国に興味関心はあっても、日本の学校システムはどうなっているか、先生方とどういう付き合いをするべきか、どのようなルールを守り、児童生徒にはどのように接するべきかといったことに関する知識不足から生じるトラブルも、残念ながら起きています。

一方、ALTの側からも、「もっと日本の先生方と一緒に研修する機会がほしい」とか、「どのような英語教育を目指してい

るのかを知りたい」という声はありましたが、すべてのALTに対して国が一律に研修をおこなうには限界がありますし、地方自治体も予算上困難な部分があり、ALTが望んでも専門性を高める機会に恵まれていなかった側面もあります。

ALTの力を総合的に把握できる

—— ALT基礎力テストを導入すると、どのようなメリットが期待できますか。

向後先生：教育委員会側のメリットは、ALTの職務に対する姿勢と外国語教育に対する知識の両側面から、採用しようとするALTの資質・能力を客観的に把握でき、安心して学校にALTを配置できることです。ALT基礎力テストは雇用形態に関わらず、ALTの資質・能力を向上させるための方策を示していると思います。

多くの自治体の外国語教育を担当する指導主事は、できるだけ資質・能力の高いALTを各学校に配置したいと思っています。その資質・能力というのは、外国語指導の専門性だけでなく、日本の子どもたちをよく理解して、日本の外国語教育を改善しようという意欲を伴ったものと考えられます。そういうALTが自分の自治体にどのぐらいいるかを把握できることは大変有益なことですし、教育委員会としてもそのような資質・能力を備えたALTを探すべきなのです。

児童生徒に対するメリットも大きいものがあります。日本の子どもたちが外国語を学ぶ際にどこでつまづきやすいかを理解できているかどうかで、支援の適切さは変わってきます。日本の外国語教育にフィットしたALTが増えることは、外国語や外国の文化に対する子どもたちの意欲や関心を高めることにつながります。これは、日本全体にとってもメリットといえるでしょう。

日本の教育システムや外国語教育の課題、改善の方向性は、今までは日本人の先生方がALTに説明していましたが、このテストを行うことにより、これらを身に付けた状態で学校に来てもらえます。そうすると、業務の効率化も図れます。学習指導要領に沿って、日本人教員とALTが同じ目線で授業や評価をすることができるようになると思います。

さらには、ALTにとっても大きなインパクトがあると思います。それは、日本の学校に勤務する「職員の一人である」という意識を持って職責を果たすようになるからです。外国語教育の目指すべき方向性を理解した上で、気持ちとしては日本人の先生方と同じ立場で授業し、評価する姿勢が生まれるのではないのでしょうか。

現場と協働できるALTへ

—— ALT基礎力テストのコンセプトは全国の学校に「良いALT」を増やすことです。先生が考える「良いALT」とは、どのような存在でしょうか。今後のALT活用の重要性も合わせてお考えをお示しください。

向後先生：これからの日本社会は、必ず、国外との接点をこれまで以上に多く持つようになっていきます。国内にいても海外とのやりとりや、国内にいる海外にバックグラウンドを持つ人たちとのやり取りが増えていきます。いや、現実にもう増えつつあります。

そのような環境の中で、児童生徒が自分たちとは違う環境で育った人たちとやりとりし、協働してプラスアルファの効果を創り出す力は、小さいころからALTと触れ合っていてこそ伸びるものです。この点からも、今後、ALTの重要性は一層高まっていくでしょう。高まらなければグローバル化への対応は困難になるとさえ言えます。子どもたちとALTとのやり取りは、上手くいく場面ばかりではありません。自分の言いたいことが伝わらない、途中で止まってしまう、相手の言っていることがわからない、そんな経験を積み重ねていきます。この経験を学校ですることが、コミュニケーション能力を伸ばすためには非常に重要なのです。

そのうえで、「良いALT」について考えてみましょう。究極的には、子どもたちの英語力や英語学習のモチベーションを向上させることができる人、「英語を使ってコミュニケーションが取れるようになりたい」という気持ちを持つ子どもを育成できる人が、良いALTと言えます。

ALTにはぜひ、コミュニケーションの楽しさを子どもたちに体感させてほしいですね。日本の子どもたちの特性や状況を把握し、さまざまなアプローチができる「教育者」としての認識を忘れないでほしいのです。そして、日本人の先生と対等にアイデアを出し、授業をプランニングし、評価を考えることができる、これからの時代の「良いALT」を目指してほしいと思います。単に日本人の先生の提案どおりに授業をするのではなく、「こうしたら、さらに言語活動が活発化するのでは」と建設的な姿勢でコラボレーションができるALTが望まれています。

—— リンク・インタラックの取り組みとして「良いALTの基準」を全国に示すことの重要性・必要性、そしてその意義について先生のお考えをお示しください。

向後先生：我が国では英語のネイティブスピーカーとしてALTを配置してきた時代が長く続いてきました。しかし、これからは日本の外国語教育に求められる資質・能力を備えたALTを配置する時代です。ALT基礎力テストは、そこに移行していくための「ブレイクスルー」と位置付けることができます。

かつては、世界の多くの国々からALT人材を確保することが優先されたため、その資質・能力まで目が行き届かなかった点は否めません。そういった状況にあって、ALTの資質・能力を高めていこうとするアプローチは非常に評価できます。日本の英語教育改善に大きな意味があると思います。

このテストは「姿勢」と「知識」のカテゴリーで学習し、そのうえでテストを受ける「育成」に重点を置いたスタイルです。ALT自身も、ALT基礎力テストを受けることでフィードバック

を得て、自分の課題や理解できていること・理解できていないことを把握できるようになります。合格後、より効果的な研修を積んでいけば、資質・能力の高いALTに成長できるのです。

文科省の教科調査官時代、私は「これからの日本の英語教育は、“社会総がかり”でやらないとうまくいかない」と繰り返し返してきました。ALTの資質・能力が「社会総がかり」の重要な一部として捉えられること、そしてALT基礎力テストに合格したALTはまさに「ティーチャー」として存在するのだ、という認識が広まっていくことを期待しています。

ALT基礎力テストの効果 合格者と受験予定者では満足度に違い

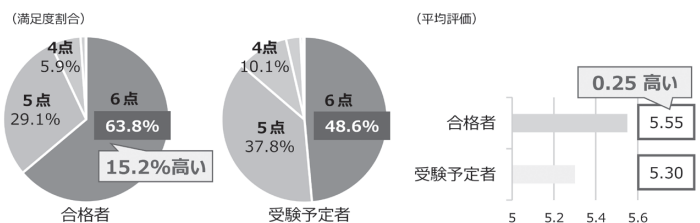
ALT基礎力テストは2021年8月のリリースから現在まで約3,000人の現任ALTが受講しました。2022年7月に、ALTを配置する全国の小学校、中学校の先生を対象にALTの指導業務に関するアンケート調査を実施した結果、すべての質問項目に対して合格者は受験予定者よりも高い評価を得ていることが明らかになりました。

「指導業務に取り組む態度や熱心さ」を6点満点で尋ねたところ、最高評価の「6点」の割合は、合格者で63.8%、受験予定者で48.6%と、15.2ポイントの開きがありました。また、平均評価も合格者は5.55、受験予定者は5.30と開きが見られました。

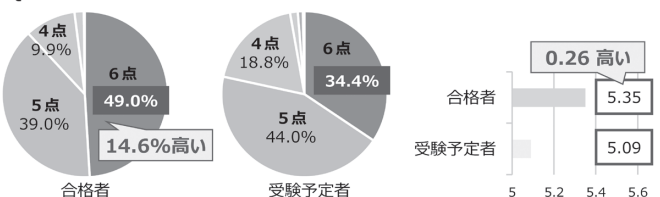
「教室等での指導業務に対する満足度」の質問で6点を獲得したのは、合格者で49.0%、受験予定者で34.4%と14.6ポイントの差がつかしました。このほか「授業外で児童・生徒と積極的にコミュニケーションをとろうとしているか」や「児童・生徒はALTの授業を楽しみにしているか」の項目でも、合格者のほうが受験予定者より高い評価を得ていました。このことからALT基礎力テストはALT育成のPDCAサイクルに組み込める効果測定ツールとして活用が可能と考えられます。

全国の学校を対象にしたALTへの満足度調査（満点：6点）

Q1 指導業務に取り組む態度や熱心さはいかがですか。



Q2 教室等での指導業務に対する満足度はいかがですか。



導入事例

高島市教育委員会(滋賀県)

同じ目線で授業や子どもに 向き合えるALTは大きな安心

ALT基礎力テストに合格したALTは、学校現場でどのように力を発揮しているのでしょうか。高島市教育委員会では、リンク・インタラックがALTを配置する以前は、新任のALTに対して指導主事や現場の先生方が個別のフォローをしていました。しかし、ALT基礎力テストに合格したALTを配置したことにより、そうした業務に割く時間が大幅に削減されました。ALTと日本人の先生が共にアイデアを出しながら授業を構想する本来の授業づくりや、児童とのコミュニケーションの時間を増やし学習意欲を引き出すことに成功しています。



(左から) 谷口あかね主監、藤原昌美校長、ジョシュア・カービー (ALT)、竹谷千秋教諭

個別のフォロー業務が軽減

琵琶湖の北西部に位置し、水と緑の豊かな自然に恵まれたエリアとして知られる高島市。2021年度から25年度実施の「第2期高島市教育大綱」では「目標1 生きる力を育む学校教育の推進」の一つとして「グローバルな視点をもって活躍する人材を育てるため、外国語で自分の思いを豊かに発信できるコミュニケーション力を育成する」ことを掲げています。市内には13の小学校、6の中学校があり、そのすべてにALTを配置してきましたが、課題は新しいALTが着任するたびに行うフォローでした。教育委員会では、市の目指す英語教育の方向性や年間指導計画を、市内のALTに手伝ってもらいながら英訳し伝える作業を、配置先の管理職や教職員は、各学校の生活スタイルや教職員の動き方などを、慣れない英語で説明する必要性に迫られていました。まるで、新採の先生方と同じように現場で育成する部分も少なくなかったといいます。

2021年度から、ALT基礎力テストに合格したALTを配置することで、その業務から解放されたのは「率直に言って、気持ちの面でも業務量としても負担が軽減した」と、高島市立今

津北小学校の藤原昌美校長先生はほっとした表情を見せませす。「本来の業務である、外国語活動や外国語科の指導に注力できるようになりました」と、同教育委員会の谷口あかね学校教育課主監も、環境の変化を感じています。

個々に応じた声かけで積極性を引き出す

学校内においてもALTの動き方に目に見える変化があるといえます。今津北小学校の英語専科指導教員の竹谷千秋先生は、「子ども一人ひとりを見て、かかわり方や声かけを変えるなど、児童理解があるのがわかります。気になることがあればALTのほうから積極的に聞いてくれるのは本当に助かっています」と言います。学校だよりが配布されたときも「子どもの個人情報を書いてありますが、自分がもらっても構わないのですか?」と確認をとるなど、児童や保護者へのプライバシーに配慮した姿勢が見られたときは、ALT基礎力テストの効果を実感したといえます。

「英語であいさつしたい、話したい、もっと話せばいいのに、という思いを持っている子が多くなったように思います。授業以外でも何かと近くにやってきて、自分の知っている限りの英語を使って、自分のことを積極的に話しています。外国のことを話してくれるときも、日本と比較しながら世界に興味や関心を広げてくれる、みんなのあこがれの先生です」(竹谷千秋先生)。

授業づくりの心強いパートナーに

同校のALTであるジョシュア・カービーは、ALT基礎力テストを経てよりよい授業が計画できるようになったと感じています。「ALT基礎力テストを合格して最も理解が深まったことは、学習指導要領とは何かということと、日本の教育の構造についてです。以前は教科書で文構造を見ていたのですが、内容がどのように、あるいは、なぜこのように構成されているのか、十分に理解することができませんでした。ALT基礎力テストでより深く理解することができました」と言います。特に、ALT基礎力テストで「姿勢」を学んだことで「周囲の教職員がどのような役割を担っているのかを理解することができ、日本人の先生がどんな支援サポートを必要としているのか、あるいは教頭先生や他の職員の方から何を期待されているかがわかります。先生方のニーズに応えられるよう集中して業務に取り組むことができます」。

「知識」の学習で学習指導要領やカリキュラムに関してALTが理解することで、授業力がレベルアップしたと感じています。「学習指導要領を理解してもらっているので、活動が子ども達に合っているか、難度はどうか、子どもたちがより話したくなるような活動にするために何が必要か、そうしたアドバイスをALTからもらえ、助かっています」(竹谷千秋先生)。

高島市では、小学校からネイティブの音声に親しみ、中学校の前倒しではない「みんながわかる外国語の授業や活動」を

目指しています。今回、ALT基礎力テストを合格したALTを採用したことにより、子どもたちの自分の考えを英語で伝える気持ちや、相手の話を理解しようという気持ちを、ALTと担任が引き出せる環境が整いました。

昨年度は、北海道のニセコ市の小学校と英語によるオンライン交流会を実現することができました。「子どもたちにより刺激になり、自然と英語を使う場面も工夫されていました。子どもたちにはいつまでも外国語を学ぶ気持ちを持ってほしいので、英語導入期の小学校でよりよい授業が行われることは大きな意味があります」と谷口あかね主監は授業の幅が広がったことを評価しています。

藤原昌美校長先生も、子どもたちが将来、地域のよさをより多くの人に発信できるようになるためにも、英語教育は不可欠だと考えています。「子どもたちの自己肯定感を高めるために

も、自分の言葉で自分の意見を伝える力をつけていきたいと考えています。その中心になるのは言葉を使った活動で、英語はその一つです。英語を学ぶことが子どもたちの視野を広げ、多様な経験ができるきっかけになればと思っています」。

さいごに

ALTの重要性が一層高まっていく中、「ALT基礎力テスト」を通してその基準を示すことで、求められる資質・能力の「可視化」が可能になります。そして、日本の英語教育、学校、子どもをしっかり理解できるALTの「質の均等化」も可能になります。リンク・インタラックでは今後、こうした取り組みを社内にもみとどめるのではなく、デファクト・スタンダードとして広くALT事業市場へと広めてまいります。